運動部活動の教育的意義に関する再検討

Re-examination about educational meaning of athletic club activity of school

1K06B253　　渡　郁恵

指導教員　主査　吉永　武史 先生　　副査　宮崎　正己 先生

【本研究の動機】

現在の学校の運動部活動は、様々な目標を持って、幅広い活動が展開されている。私は、中学から現在まで１０年間ソフトテニスを続けてきた。そこでは、技術の向上だけでなく、周囲の人々から応援されるような人間になることを教えられ、そのような人間性を培うためには、自分のことばかりでなく、他者のことを思いやり、何事にも一生懸命取り組む姿勢が最も大切であるということを学んだ。現在の運動部活動は、絶対的な枠組みがないからこそ、練習条件や生活環境、指導者のパーソナリティ、集団における人間関係などの様々な要因によって、その性質が変わるという二面性を持っていると私は考える。そのことは、勝利至上主義や極端な上下関係、顧問教師のしごきや体罰など、様々な問題につながっていることは事実であると言える。そこで、自らの経験を踏まえたうえで、なぜ学校教育の一環として運動部活動が取り入れられているのか。そして、その活動に何が期待されるのか。運動部活動本来の教育的意義を明らかにしたいと考え、本研究を行うことにした。

【研究の目的と方法】

運動部活動の持つ様々な問題点について分析し、本来の運動部活動が持つ可能性について検討する。そして、これからの運動部活動のあるべき姿についての提言を行う。本論文は、運動部活動に関する関連文を購読し、考察を進めいていく文献研究の方法を用いる。

【各章の概要】

第１章では、戦前・戦後での運動部活動の実践の変遷について歴史的背景を踏まえながら考察する。その中で、部活動は、様々に変化をしながらも、学校における重要な教育的機能を担ってきたと言える。教科外活動であったため、明確に教育的意義が規定されることなく、生徒の主体的要求とそれに応える教師の献身的な努力・指導によって慣例的に支えられてきたことが確認できた。

第２章では、運動部活動の現状と課題について考察していく。極端な勝利至上主義や運動部活動を取り巻く環境の問題として、少子化・顧問教師不足・家庭からの視点、さらには運動部活動における指導者と集団内での人間関係について考察する。そして、学校教育の一環としての役割を果たすために、どのような解決策があるかを検討していく。

第３章では、これまでの研究をもとに、運動部活動の教育的意義について検討していく。新しい学習指導要領において部活動が明記されたことを取り上げ、部活動での活動目標が義務づけられた。果たさなければならない活動が明確になったことによって、それを実践するための検討を行う。そして、運動部活動が生徒指導や生涯スポーツに貢献する可能性についても検討していく。

結章では、この論文の題名にもあるとおり運動部活動の教育的意義について総括する。新学習指導要領において、部活動について明確に言及されることとなったことで、教育課程の中に明確に位置づけられ、学校教育の一環としての

教育的意義が認められた。現在でも問題になっている勝利至上主義や極端な上下関係、顧問教師の体罰からは、運動部活動の役割は決して果たすことができないと考える。いかなる状況であっても、最も優先されるべきことは生徒が積極的にスポーツを楽しみ、健全な活動を実践できる環境を作ることである。そして、この環境こそが、運動部活動の教育的意義を最大限に生かすことができる運動部活動のあるべき姿ではないかと考える。